

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 25 日現在

機関番号：33202

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23500821

研究課題名(和文)感情イメージ理論に基づくDV防止教育への応用的研究

研究課題名(英文)Applicational Study for Prevention of Domestic Violence(DV)Based on Affective-imagery Theory

研究代表者

大石 昂(OOISHI, Takashi)

富山国際大学・公立大学の部局等・教授

研究者番号：20115132

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円、(間接経費) 1,170,000円

研究成果の概要(和文)：(1)理論上の成果 生活の中で形成される感情イメージについて、「悲、喜、怒、嫌、驚、望、愛、恐」の8感情を基本感情とすることの妥当性が確認された。(2)応用面の成果 従来の1/6の40の質問項目からなる短縮版イメージ調査法を作成し、妥当性と信頼性を確認することができた。これによって実際場面での利用可能性が高まった。(3)臨床面の成果 DV問題に、イメージ調査法を適用することにより、DV当事者(被害者、加害者)における特有の感情イメージ構造の歪みを分析し、予防教育に活かすことが可能となった。

研究成果の概要(英文)：1)The theoretical result;On the affective imagery,that is constructed in everyday life and decides his/her behavioral tendency,we made sure Plutchic's 8 affections model as basic affective components.Furthermore,we found out that 4 affections(sadness,joy,anger,disgust)are more important.2)The result for application;We made Easy Image Diagnosis Test,that is shorter than the former test,and confirmed it's reliability and validity.3)The practical result;we analyzed the construction of affective imagery of the persons concerned of the domestic violence(DV),and recognized their characteristic mental distortions.

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学・応用健康科学

キーワード：ストレスマネジメント 感情イメージ 感情 イメージ デートDV 予防教育 愛着スタイル 自傷行為

1. 研究開始当初の背景

(1) 上杉 (1979) によって開発されたイメージ調査法は、認知的成分であるイメージと感情を統合的に扱いつつ、日常生活の中で形成されてきた感情イメージの構造と機能を解明し、それに基づいて様々な不適応行動の改善を図る可能性を示してきた。この調査法の背景にある感情イメージ理論の発展とともに、イメージ調査法の応用性を高めることが重要な課題となっている。人の様々な感情は、スペクトル状の連続性・遷移性を持っていると考えられ、どのような感情を基本成分と見なすかは研究者間で必ずしも一致していない。しかし重要な点は、感情イメージ理論が依拠する Plutchic の 8 感情モデルが感情全体を網羅するに十分なものであるかどうかである。この点について確認を行い、8 感情の中でより中心的な成分を見出し得るのかも検討課題である。これらについて、構造方程式を用いた構造解析などの新しい手法による感情イメージ構造のダイナミックな解析が必要と考えられる。

(2) 松野 (2010) らは、青年層におけるデート DV 問題にイメージ調査法を応用し、DV 当事者において、親密な異性関係の中での「無視」や親密性と「支配」・「服従」という対象語 (事象) を巡る特異な感情イメージ構造が見られることを明らかにした。DV を説明する要因として愛着スタイルを指摘する Dutton (2007/2011) の研究や自己に対する暴力である自傷行為と対人関係の関連性を指摘する Klonsky (2007) の記述を参考にしながら、さらに検討を深めることが重要と考えられる。

2. 研究の目的

(1) 人の行動に重要な影響を与える要因である認知構造と感情特性を総合的に捉えようとする感情イメージについて、これまでの感情理論やイメージ研究の成果に立って検討を深め、理論的な妥当性を高める。

(2) イメージ調査法は、8 (感情) × 30 (対象語) の 240 項目で構成されているが、感情語とともに DV 問題に深く関連する対象語を精査し、30 分程度で実施可能な短縮版イメージ調査法を作成する。

(3) イメージ調査法をデート DV 問題に適用し、青年における DV 傾向および DV に関わるとみられる感情イメージ構造を解明し、予防教育への知見を得るとともに、感情イメージ理論の妥当性を実践的に検証する。

3. 研究の方法

(1) 本研究では、デート DV 問題という具体的なフィールドにおいて研究をすすめる、それを通して感情イメージの構造と機能を具体的に明らかにすることを目指す。そのために、質問紙調査、DV 問題の関係者へのインタビュー調査等を実施して資料を収集する。質問紙調査としては、イメージ調査法を中心に、

NEO-FFI 日本標準化版や 2 者関係における対人動機を検出する IF-THEN 法、成人愛着スタイル尺度 (ECR) 日本語版、自傷行為に関する質問と DV に関する経験や知識を問う質問等を作成し、若年層を対象に実施する。

(2) イメージ調査法及び質問紙調査によるデータについて、統計的解析を行い、感情イメージ構造の機序について従来の研究成果との比較を行う。多変量解析によって、基本感情としての 8 感情の妥当性を確認するとともに、感情語の絞り込みを行う。また、インタビュー等を通して DV 問題により深い関与を持つ対象語の精選を行う。

4. 研究成果

(1) 感情イメージ研究の理論的基礎を確認することができた

本研究においては、感情イメージ理論について、対人社会動機研究およびパーソナリティ研究との関連性についての検討を行った。また、理論的基礎にある 8 感情モデルの妥当性について統計的な検討を行った。これらの結果次の諸点が明らかになった。

「母」、「ライバル」、という対象語に対する、「怒」、「望」の感情得点と IF-THEN 法によって検出された動機成分との間に有意な相関関係が認められたことから、2 者関係における対人動機という観点からも感情イメージ研究の妥当性が支持されたといえる。

感情イメージの個人的特性と NEO-FFI によるパーソナリティ特性の間に一定の関連性が見られた。特に、協調性の高い人ほど多くの感情語に対する感情イメージがポジティブであることが示された。

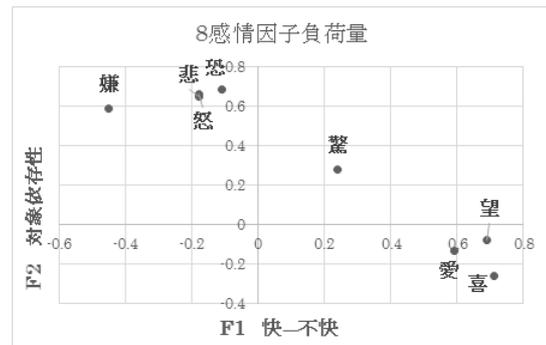


図-1

複数の調査において使われた対象語の中から比較的安定した数量的構造性を持つ 16 語を選び、8 感情モデルの妥当性とその中からより中心的な感情語を特定できるかどうかの検討を行った。その結果、8 感情に「信、拒、憎、確、疑、尊、恥、好」を加えた 16 感情モデルの場合も、因子構造や対象語との関係および感情価において 8 感情モデルとほぼ一致する結果を得ることとなった。このことは 8 感情モデルの妥当性を支持するものである。

(図-1)

8 感情の中からより中心となる感情につい

てステップワイズ法による重回帰分析を行った結果、「嫌、悲、喜、怒」の4つの感情語を独立変数とすれば、諸対象の感情価に対する決定係数  $R^2$  が .80 ~ .90 となることが分かり、感情価の 80 ~ 90% がこの4つの感情における評定値で説明可能であることが示された。これにより、イメージ調査法の感情語を半分にすることが可能となり、質問項目数を大きく減らした短縮版イメージ調査法の作成が可能となった。

(2) 短縮版イメージ調査法を作成し、実施した

本研究に基づいて、4つの感情語とデートDVに深い関連があるとみられる10の対象語に基づく40項目からなる「デートDVイメージ調査法(短縮版)」を作成し、実施することができた。項目数を従来のももの1/6に減らしたことで回答時間が約30分と大幅に縮小され、検査の信頼性を高めることにつながったと考えられる。

(3) デートDVの心理学的考察を行い、その予防教育への示唆を得ることができた

短縮版イメージ調査法によって求められた感情価データの多変量解析の結果、「デート」「恋愛」「結婚」「セックス」「対等」の5対象語によって構成される第1因子(相愛状態因子)と「支配」「束縛」「服従」「暴力」「無視」の5対象語によって構成される第2因子(主従状態因子)が抽出された(この二つで累積寄与率は56%)。このうち第2因子は、DVにつながる可能性を持つものであり、この調査法を用いることで、それぞれの因子に対する感情価によってDVやデートDVの潜在的可能性を発見できる可能性があるといえる。さらに対象語の因果的連関を解析することにより被験者のDVにつながる心理的要因を明らかにすることも可能と考えられる。

成人愛着スタイルとデートDVの加害・被害体験の関連性について検討を行った結果、加害経験と親密性回避の低さに関連が見られた。また女性において、加害経験、被害経験と見捨てられ不安の間に関連があることが認められた。すなわち「恐れ型」ないし「とらわれ型」の愛着スタイルとDV傾向の関連性が示唆された。これらは先行研究とお

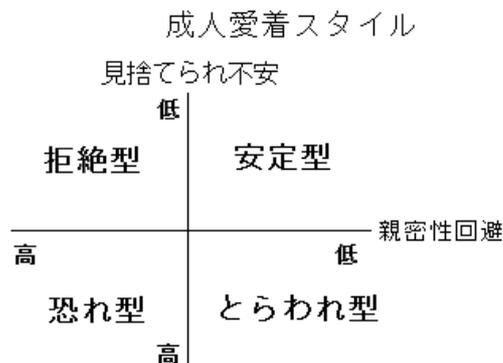


図-2

おむね一致しており、デートDVが、親密な他者の行動の意味に関する認知の歪みに関連しているとするDuttonらの見解を支持するものと考えられる。(図-2)

自傷経験を持つ者について、愛着スタイルおよび感情イメージの特徴を調べたところ、見捨てられ不安および親密性回避のいずれも自傷経験の高さと関連することが示され、ロジスティック回帰分析では、自傷経験に関連した変数は、「見捨てられ不安」と「無視」の感情価であった。概して、自己観がネガティブ、見捨てられ不安が強い、無視に対してネガティブな感情が強い、親密な他者との安定した関係にポジティブな感情を持っていないといった傾向が、自傷行為と関連していると考えられる。デートDVと自傷行為の心理的機序の関連性については、さらに慎重な分析が必要であるが、ともに自己と親密な他者に対する感情イメージの歪みという点で共通の背景が認められるのではないかと思われる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5件)

鈴木 賢男、大石 昂、鈴木 国威、ほか、「感情イメージ調査」についての研究 - 年代を経た大学生においてみられた感情イメージ構造の安定性、文教大学人間科学研究、第30号、2008、121-131

鈴木 賢男、大石 昂、鈴木 国威、ほか、「感情イメージ調査」についての研究( ) - 諸対象についての感情尺度の因果論的構造と性格次元との関連性、文教大学人間科学研究、第31号、2009、189-205

鈴木 賢男、大石 昂、鈴木 国威、ほか、「感情イメージ調査」についての研究( ) 個別対象の感情イメージ構造の安定性と対象語・感情語の選定、文教大学人間科学研究、第32号、2010、173-188

鈴木 賢男、大石 昂、鈴木 国威、大平 泰子、ほか、「感情イメージ調査」についての研究( )、文教大学人間科学研究、第33号、2011、197-209

大平 泰子、大石 昂、鈴木 国威、ほか、大学生における自傷行為と対人関係愛着スタイルおよび感情イメージとの関連から、富山国際大学子ども育成学部紀要、5巻、2014、11-18

[学会発表](計 2件)

鈴木 賢男、大石 昂、鈴木 国威、ほか、対象語の感情的評価とイメージの鮮明性、空想傾向との関連 - 「感情イメージ」の有意性の検討、日本イメージ心理学会第11回大会、2010、

堀内 正彦、大石 昂、大平 泰子、鈴木 国威ほか、感情イメージと対人社会動機

の関連性についての予備的研究、日本イメージ心理学会第12回大会、2011

〔図書〕(計 件)

〔産業財産権〕  
出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

大石 昂 (OOISHI, Takashi)  
富山国際大学・子ども育成学部・教授  
研究者番号：20115132

### (2) 研究分担者

大平 泰子 (OOHIRA, Taiko)  
富山国際大学・子ども育成学部・講師  
研究者番号：00555188

鈴木 国威 (SUZUKI, Kunitake)  
大阪人間科学大学・医療心理学科・講師  
研究者番号：20580913

### (3) 連携研究者

( )

研究者番号：